

会 師 医 市 牧 小 苦  
藤 井 理

# アトピーとステロイド剤

アトピーとは「奇妙な」という意味のギリシャ語です。現在、アトピー性皮膚炎は急増しており、思春期を過ぎても治らなかつたり、あるいは成人になつてから初めて発症したり、さらにはステロイド外用剤の副作用による「ステロイド皮膚症」の発生もあり、社会問題にさえなつてつづあります。今回はステロイド外用療法に対する恐怖と不信

## 症状に合わせて使い分けを

を少しでもなくしていただくことを目的に、皮膚科医の立場から話してみたいと思います。

アトピー性皮膚炎は、乾燥肌で外的刺激に敏感でかゆみを起こしやすい体質を持った人に、ダニ、ホコリ、ペットの毛、カビや細菌、食べ物などの抗原刺激が作用して発症すると考えられています。さらに増悪・誘発する因子として精神的ストレス

や、肌に刺激のある衣類や日光、発汗、乾燥した空気などがあげられ、農薬や食品添加物などの化学物質の氾濫(はんらん)が本症の増加に拍車をかけています。

そこで治療として、衣食住を中心とした環境の整備と改善に加え、いわゆるスキンケアが基本となり、成長に伴う自然治癒の高まりとともに症状が安定し

てくるのを待つことになりません。スキンケアにおいては、入浴を励行し、保湿作用のある外用剤で乾燥肌を保護しつつ、症状のひどいところだけにステロイド剤を使い、良くなつたらすぐに休むようにしてください。

特に顔はステロイド剤の副作用が最も出現しやすいところなので、まずは非ステロイド剤を使つてみて、症状が抑えられない

ときに限つてステロイド剤を用います。また、ステロイド剤を使つて安定していた人が、副作用を恐れるあまり、急にステロイド剤を中止すると、リバウンドによる急性増悪を起こすことがありますので注意が必要です。

皮膚科医としては、症状に合わせてステロイド剤を使い分け、副作用の予防と軽減に努めていることを強調し、医師を信頼していただきたいと思ひます。

お問合せは、苦小牧市医師会

電話 33-4720へ